

【事例共有】夏場の試合中での選手、審判員の体調の変化の気づき、対応

日頃より、(一社)新潟県サッカー協会審判委員会の活動にご理解とご協力を賜り、感謝申し上げます。

さて、新潟の夏らしい気候になってきた今日このごろ。厳しいコンディションの中での試合が続く中で審判員、インストラクターで共有すべき事象が先日、起きましたので共有させていただきます。

以下は、試合を担当した主審からの報告です。

日付：7月21日(土) 15:00 kickoff

会場：新潟経営大学

大会：北信越大学リーグ1部

対戦カード：新潟経営大学 vs 新潟医療福祉大学

この試合で新潟医療福祉大学のT選手が熱中症とみられる症状で緊急搬送される事案が発生したので報告します。

T選手は後半90分に交代で退きました。

その後、座り込み、全身の痙攣が始まりました。(と聞いています)

医療福祉大のマネージャーが駆けつけたが、自分の手に負えないということで、経営大のトレーナーに助けを求めます。

その後、新潟経営大のスタッフや近くにいた方たちが声をかけ、冷やし、救急車を手配しました。

※この間もゲームは進行していました。試合は後半49分で終了しました。

試合が終了してから数分後、救急車が到着するころには痙攣は収まり、問いかけに返事ができるような状態でした。

ただ、対応として良くなかった点がありましたので報告します。

試合中に新潟経営大学の選手から「向こうの13番、ヤバいっすよ」と伝えられました。

チラッと様子は見たものの、立っているし、どこか痛そうにしている雰囲気もなかったので、特に気にすることなくゲームを続けました。

本来であれば、選手の安全を第一に考え、経営大の選手の主張に向き合い、時間をとってT選手を観察するべきでした。結果として大事には至らなかったものの、ゲームの進行を止めるべき事案であったと反省しております。

他の審判員に対しては、自分の体調管理もさることながら、

選手の熱中症についてチーム任せにせず、選手の安全を守るために行動してほしいと思います。

※この試合のWBGT値は前後半とも開始直前で29.5と報告を受け、飲水タイムを設けました。

以上

共有事項

- ・「選手の安全を守る」ことが審判員に求められていることを再確認しましょう。
- ・選手の体調、顔色などの変化に気づいた、または他の競技者からの情報を得たのであればその競技者の様子を伺い、状態を確認する。
- ・不安を感じたらすぐにチームスタッフ(チームドクター等)の意見を仰ぐようにしましょう。
- ・飲水タイム、クーリングブレイクを設ける基準値は決まっていますが、基準値を下回っていたとしても設けた方が良い時もあると思います。そのときは、マッチコミッショナー、両チーム、運営と協議することが大切です。
- ・審判員も試合中に体調を崩す、負傷することがあります。そのときは、無理をせずに勇気を持って交代しましょう。
- ・試合に向けた自身のコンディション管理に気をつけましょう。

例) トレーニング・食事・睡眠

こまめな水分、塩分の補給

暑熱化対策(手のひらを冷やす等) <http://www.jfa.jp/medical/news/00021966/>

以上